

大館の陶芸を訪ねて

市民リポーター 片岡英子（下代野4区）

大館の伝統工芸として、曲げわっぱの知名度は全国的に高いものになっていきますが、曲げわっぱと同じ、日常生活に用いる「器」である「陶器」を作ることは、大館ではあまり栄えていないかのよう
に思われます。そこで今回は、大館の陶芸の現状に注目してみよう
と思います。

大館では今から約七十年前に、「沼館焼」と呼ばれる作陶の記録が残っています。主に「壺」を作っていたようなのですが、残念ながら現在は、その活動は跡を絶ち、詳しいことを知る道が残されていません。当時の人々が、生活の道具作りとしての作陶に情熱を注げなかったからなのでしょう。か。それとも、この地では作陶に適した土に巡り会えなかったからなのでしょうか。

土や火との格闘

現在、大館で作陶活動を行っている窯を訪ねて、「つちくら」と「大館陶芸愛好会」でお話を伺いました。



「つちくら」にて

「つちくら」（芳賀貞夫代表は、始まって十一年目の窯です。この窯では「大館焼」という名の陶器を製作しています。大館焼の特徴は、北国大館の雪をイメージした「ぬくもりのある白色」と、晴れ渡った空の「淡い青色」とを美しく調和させていること。陶芸の魅力とは何かを芳賀さんに尋ねると、「窯出しするまでの、息もつけないような緊張感です。形のな
い土を自分がイメージする陶器に
変貌させるまでの工程すべてが緊
張の連続。ほんのちよつとの誤

差も許されなれません。ひとこと
で表現するなら、土や火との格闘
ですね」と、陶芸への熱い思いを
語ってくれました。日々の忙しさ
のために、つい心に余裕がなくな
りがちな現代人は、時に陶芸など
に取り組んで気持ちをゆつたりと
させる必要があるな、と考えてい
た私に、芳賀さんは次のようにも
語ってくれました。「陶芸は、心
に余裕を持つためにするのではな
いと思いますよ。何でもないよう
な事柄一つにも目を向け、思いを
はせて、そこから様々なものを感じ
取ることができなければ、本当
に価値のあるものに気付くことが
できないと思うんです。忙しい日
常の中にあっても、常に身のまわ
りの物事を見逃さないよう感覚を
研ぎ澄まし、想像力を豊かにする
ことが大事なのではないでしょう
か。そうでなければ、良い作品も
できないと思いますよ」。陶芸と
はまさに心の美学といえるのかも
しれません。

手作りへのこだわり

「作陶のために必要な作業は、

何から何まで自分たちの手で行
っています」という「大館陶芸愛好
会」（田村稲男会長）では、「鳳凰
焼」と呼ぶ陶器を作っています。
大館の土を用いて、素朴で温かみ
が感じられる作品を目指している
この窯は、公民館でのサークル活
動がきっかけとなってスタートし、
今年で二十二年目を迎えます。会
員の年齢層は二十歳代から六十歳
代までと幅広く、現在の会員の中
には陶芸歴二十年を超える人もい
ます。

この会の手作りへのこだわりは
徹底していて、なんと陶器を焼く
ための窯や、「陶芸村」と名付け
た作陶工房の建物でさえ自分たち
の手によるものだそうです。作品
から感じられる温かみは、きつと
そんな作り手のぬくもりに裏打ち
されたものに違いないな、と感じ
ました。

会では、毎年作陶展を開催し、
会員の作陶技術の研さんを図って
います。また、県内外の窯元を見
学したり、自分たちが作った陶器
を囲んでタンポ会をしたりと、い
ろいろな行事を通して人と人との
触れ合いを大事にしています。自
作の陶器でタンポ会ができるなん
て、すてきだと思いませんか？

土をこね、形を作り、色付けを
して窯で焼き上げるといった一連
の作陶作業は、私たちの目から見
ると、毎回同じことをしているよ
うに思われますが、実はすべての



陶芸村にて

工程で毎回微妙な差が生じ、出来
上がりはまさに千差万別。なにし
る窯の中への作品の置き方一つで
さえ、焼き上がりに大きな違いを
生む原因になるといいます。田
村さんは「自分がイメージするも
のを求めて、何回でも作ってみま
すが、なかなか『これでいい』と
思える仕上がりには出会えませ
ね」と話します。

陶芸の世界とはなんと奥が深い
ものなのでしょう。自分が求める
理想を実現するために試行錯誤を
重ねる、そんな作陶活動に思わず
心が引かれます。

「曲げわっぱ」のイメージが強
いこの大館の地に、十年、二十年
と続いている窯があることを知
り、うれしく思いました。今後も
大館に根ざした陶芸が盛んになっ
て欲しいと思います。そして、陶
芸が大館の歴史に残るものに育つ
ことを祈っています。